

雑 報

IAU シンポジウム 114

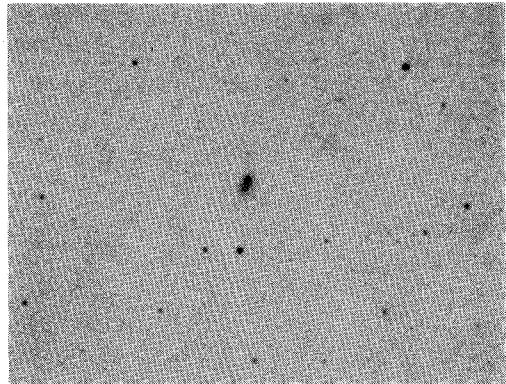
Relativity in Celestial Mechanics and Astrometry

本シンポジウムは5月28日から31日まで、白夜直前のソ連邦レニングラード市にて開催された。最近、VLBI、レーザー測距、衛星搭載望遠鏡等、いわゆる宇宙新技術の進展に伴い、一般相対論が天体力学や位置天文学に及ぼす影響が重要視されるようになってきた。本シンポジウムは、この影響を議論する場として設けられたものである。論文発表は、1) 一般相対論の力学的効果、2) 太陽系天体の最新運動理論、3) 基準系と天文観測の相対論的整約法、4) 地球近傍での相対論的效果と地球力学、5) 時刻系、6) 現行の高精度観測と相対論、7) 将来における相対論的效果の観測、の七部門にわたり、その数は約50篇にも達した。参加者は、ソ連国内から約60人、国外から約60人、計120人ほどであり、日本からは、筆者の他、東京天文台から、古在・木下・藤本の各氏が参加した。査証発行の関係で、フランスから参加予定の人々が、一人を除いて全員来れない、というハプニングもあった。

本シンポジウムの話題の中心は、何と云っても、上記3)の相対論における座標系の取扱い方であって、同部門における筆者らの招待論文はかなりの反響を呼び、これに関する討議のため、一般論文が二篇、午後の部に変更されるほどであった。他に印象に残った論文としては、a) ソ連の惑星探査機等のデータ解析による惑星理論の構築 (Akim 他)、b) ミリ秒パルサー観測の惑星暦への貢献 (Standish)、c) ソ連におけるガリレイ衛星の観測 (Kisseleva 他)、d) 太陽の J_2 を太陽振動から求める (Hill 他)、e) 一般相対論は実験科学である (Will)、f) 探査機搭載型複式光学干渉による精密位置観測 (Reasenber)、g) 光の重力屈曲の観測による単独星の質量決定 (Kovalevsky) 等があった。全体として、この分野への一般相対論の導入は、未だその端緒を開いたに過ぎないという感を強くした。 (福島登志夫)

NGC 4451 銀河の超新星 (Super Nova 1985G)

埼玉県所沢市の堀口進午氏は、1985年3月21日15時06分15秒から15時11分15秒 (UT) までの間に、口径31cm反射望遠鏡にトライXを使用して撮影した、NGC 4451 銀河の中心核から西へ2秒角、北へ5秒角だけ離れた場所に光度14.5等級の超新星らしい像を発見して、東京天文台へ連絡して来られた。この像は2月22日には17等級以下で写真原板では認められない。また3月24日の写真原板では光度約15等級で認められてい



る。

東京天文台木曾観測所105cmシュミット望遠鏡により3月28日に直接写真が撮影され、その原板を征矢野隆夫氏が測定した結果、次の位置が得られた。

$$\alpha = 12^{\text{h}}26^{\text{m}}07^{\text{s}}.96 \quad \delta = +9^{\circ}32'14''.7 \quad (1950.0)$$

その後、ESO天文台でスペクトル観測が行なわれ、タイプIIの超新星であることが判明した。このNGC 4451は一見楕円銀河と見られるレンズ型をしているが、ESOの観測では普通のSc型であり、今回の超新星は内部腕に出現した、と報告されている。(香西洋樹)

お 知 ら せ

ハレー彗星の情報は、この番号でどうぞ。

三鷹 (0422) 46-1000

“ハレー彗星”についての最新の情報を、東京大学東京天文台の提供でお届けします。

アンコール番号 (0422) 49-4000

(前回の話が聞けます)

ハレー彗星 (1910年回帰) 記事をお分けします

日本天文学会では、以前から要望のありましたハレー彗星 (1910年回帰) の月報記事を会員の皆様にお分けることにしました。

内容は、明治41年第1巻~44年第4巻からの抜刷で、本文はA4版58頁となっています。但し、1000部限定版としますので在庫がなくなりましたらご容赦下さい。

価格は1冊につき500円で送料は220円です。希望者は下記へ代金・送料 (720円の振替または郵便切手) を同封の上お申し込み下さい。

宛先: 〒181 東京都三鷹市大沢 2-21-2

東京天文台内 日本天文学会ハレー彗星特集号係

電話: 0422-31-1359

郵便振替: 東京 6-13595

※郵便切手同封の際はなるべく60円切手をお願いします。